

1 令和 4 年度 全学 FD 活動概要

1-1 本学 FD 活動の概要

本学では平成 20 年度、「金沢大学 FD 委員会規程」（後掲：4 資料編）に基づき、教育企画会議に全学の FD 委員会を設置した。

FD (ファカルティ・ディベロップメント) とは、

授業の内容・方法の改善等による教育の質の向上並びに学生の心身の保護とキャリア形成を促進する等の学生支援を図るための教員及び部局等の研究、研修等の自発的取組みをいう。（同指針第 2）

FD 委員会は、平成 20 年度に「金沢大学における FD 活動指針」（後掲：4 資料編）をまとめた。同指針は FD 活動が継続的かつ実質的に改善するために、FD 活動をいわゆる PDCA サイクルの中に位置づけている（図 1）。その一環として FD 委員会は各部局等が毎年度作成する報告書に基づき、当該年度の全学における FD 活動に関する報告書（「年度報告書」）を作成することとした。この規定に基づいて作成したものが本報告書である。

本報告書では、各部局等が令和 3 年度の活動に対して行った自己評価のみならず、令和 4 年度における改善に向けての取組み予定についてもまとめている。これらの点について他部局等の状況を相互に確認し、FD 活動を相互に促進しあうことで、本学全体の FD 活動が継続的かつ実質的に改善することが期待できる。

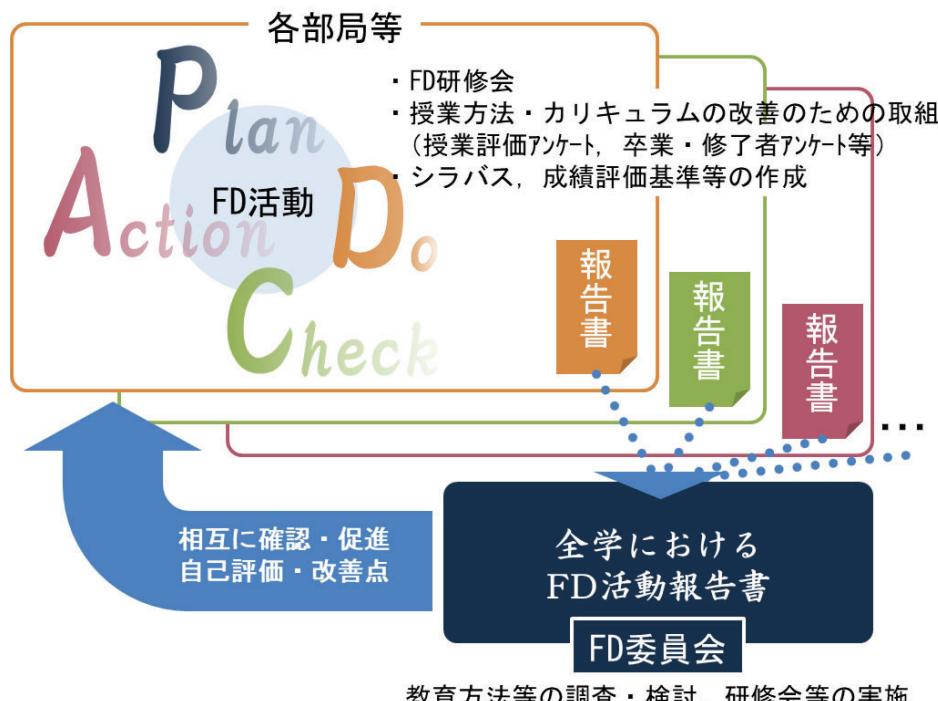


図 1 金沢大学における FD 活動

なお、同指針の特徴の 1 つとして、授業の内容や方法の改善に関することにとどまらず、学生の心身の保護とキャリア形成を促進する等、学生支援に関する活動をも FD 活動の中に含めている点が挙げられる。この点に関連して、本学では教育企画会議学生生活委員会を中心に「学生支援・学修支援」に資する目的で『教職員必携 学生サポートガイドブック』を毎年度、見直しを行い、アカンサスポートに掲載するとともに、関係教職員にエッセンシャル版パンフレットを配布している（図 2）。その内容は学生相談、留学生支援、キャリア支援、障がい学生支援等、多岐にわたっており、教職員は本冊子を有効に活用することにより、学生が抱えた問題を早期に解決し、すべての学生が「充実した学生生活」が送れるように、学生支援に努めている。

また、教員の FD 活動支援や学生支援の分野で、職員の果たすべき役割はより一層大きくなりつつある。こうした現状に鑑み、職員の SD（スタッフ・ディベロップメント）及び BSD（バックアップ・スタッフ・ディベロップメント）活動についての指針を盛り込んでいることも同指針の特徴の 1 つである。

ところで、同指針では、教学マネジメントセンターが FD 及び BSD 活動に対して必要な支援を行うことを定めている（第 8）。教学マネジメントセンターが令和 4 年度に行った FD・BSD 活動及び他部局等の FD・BSD 活動に対して行った支援の内容については 1-5 教学マネジメントセンターの活動において述べる。



図 2 教職員必携学生サポートガイドブック

1－2 各部局等からの回答をもとにした点検

本学は、学則第3条において、「教育研究水準の向上を図り、本学の目的及び社会的使命を達成するため、教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価（以下「自己点検評価」という。）並びに授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を行う」と定めている。また、「金沢大学におけるFD活動指針」（以下、FD活動指針）においては、研修及び研究に加えて、「改善に向けての取組みを、計画・実践・評価・改善のサイクルの中に位置づけ、より組織的かつ継続的に行うことにより、実質的な改善へと繋げて」いくとしている。この指針を受けて、全学および各部局は、これら学則、「FD活動指針」等に基づきFD活動を推進している。

計画・実践・評価・改善のサイクルとは、学類、専攻ごとに、①学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）を定め、卒業・修了時における到達目標を明確にする、②ディプロマ・ポリシーに沿ってカリキュラムを体系化し、各授業科目の役割をマップ及びツリーという形で可視化する、③各授業科目のカリキュラム上の位置付け、教育内容・方法・到達基準をシラバスで学生に伝達する、④授業科目および教育プログラムの達成状況を、成績分布・授業評価アンケート・学修ポートフォリオ・卒業・修了者アンケートで確認する、⑤それらの分析結果に基づいて、各授業科目の教育内容・方法の改善、教育プログラムの改善を行い、部局におけるカリキュラム（マップ及びツリー）を再検証するというものである。

令和4年度は、FD活動報告書の効率的かつ効果的な構成の観点から、各部局への照会事項を厳選することとした。併せて、各部局等のFD活動の掲載について、照会事項単位での掲載を改め、各部局単位での「FD活動計画」➡「諸活動チェック」➡「自己評価」という改善向上サイクルを重視する観点から部局単位での掲載とした。

各部局のFD活動を事実に基づき確認するため、「令和3年度FD活動報告書」に記載した当該年度の自己評価・総評及び令和4年度に向けた改善計画に沿いながら、「照会事項1 シラバス改善のための取組みの実施状況」、「照会事項2 授業方法・カリキュラム改善のための取組み等の実施状況」、「照会事項3 成績評価基準等の作成・検証状況」、「照会事項4 FD研修会の実施状況(本学主催)」、「照会事項5 令和4年度FD活動の自己点検及び総評」の5項目について照会した。以下に、それらについての回答を点検した結果について述べる。なお、項目によって回答母数が異なる場合もある。

照会事項2 シラバス改善のための取組みの実施状況

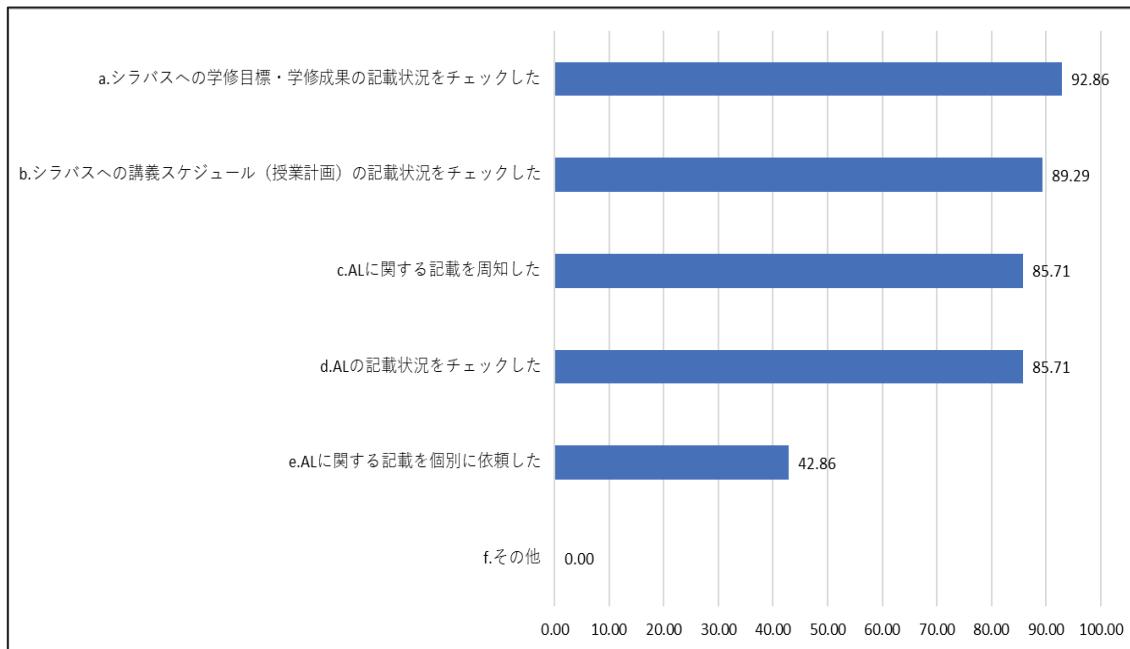
【検証事項1】令和4年度の実施状況

1) シラバスの点検①（教学マネジメント関連）

シラバスの点検については、大きく教学マネジメント関連と SGU 関連の 2 つに分けた設問を設定した。教学マネジメント関連としては、「シラバスへの学修目標・学修成果の記載状況をチェックした」、「シラバスへの講義スケジュール（授業計画）の記載状況をチェックした」、「AL に関する記載を周知した」、「AL の記載状況をチェックした」、「AL に関する記載を個別に依頼した」、「その他」のチェック欄を設けた上で、その具体的な内容について記述する形としている。

各項目のチェック率は図表 1-2-1 のとおりであるが、シラバス作成における基本項目である「シラバスへの学修目標・学修成果の記載状況をチェックした」については、医薬保健学総合研究科、先進予防医学研究科、「シラバスへの講義スケジュール（授業計画）の記載状況をチェックした」については機械工学類・機械科学専攻、医薬保健学総合研究科、先進予防医学研究科がチェックしておらず、今後は全部局がチェックを行うよう改善が必要である。恒常的なシラバス点検体制が不十分であることがうかがえる。

図表 1-2-1 各項目のチェック率（回答母数：28）



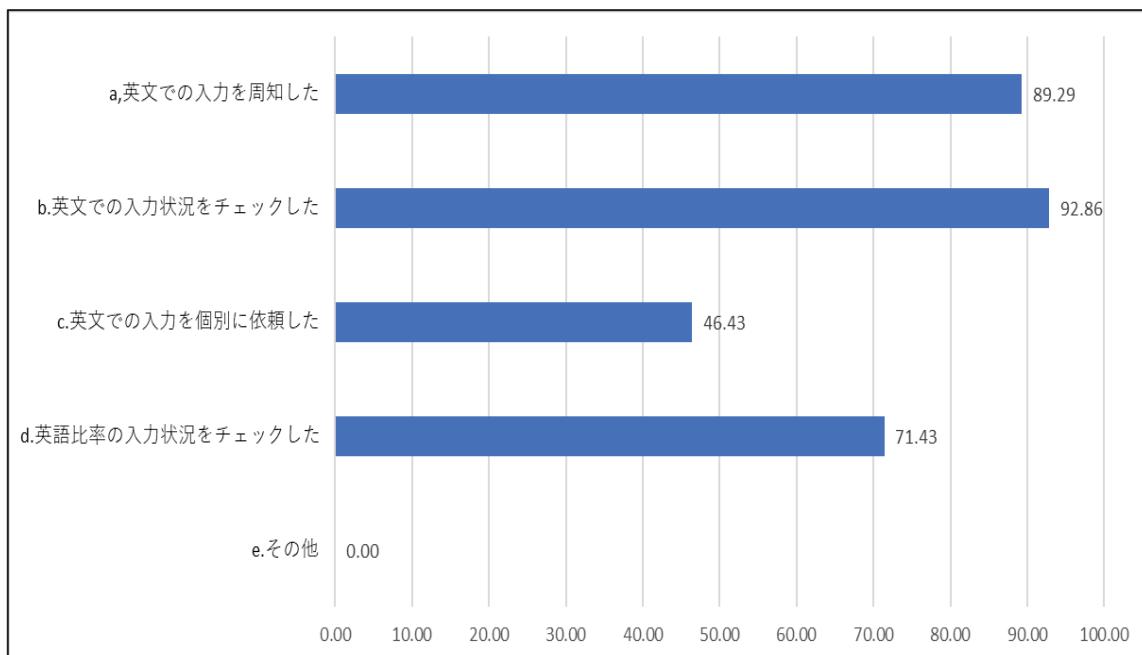
2) シラバスの点検②（SGU 関連）

次に、SGU 関連で求められている授業英語化に関する設問として、「英文での入力を周知した」、「英文での入力状況をチェックした」、「英文での入力を個別に依頼した」、「英語化率の入力状況をチェックした」、「その他」についてのチェック欄および具体的な内容について回答する形としている。

1－2 各部局等からの回答をもとにした点検

各項目のチェック率は図表1－2－2のとおりであるが、「英文での入力を周知した」については、医薬保健学総合研究科、先進予防医学研究科、「英文での入力状況をチェックした」については機械工学類・機械科学専攻、教職実践研究科がチェックしておらず、今後は全部局がチェックを行うよう改善が必要である。授業英語化関連でのシラバスチェックが不十分であることがうかがえる。

図表1－2－2 各項目のチェック率（回答母数：28）



「英文での入力を個別に依頼した」、「英語化率の入力状況をチェックした」が半数前後の低い値となっており、授業英語化への取り組みが不十分であることがわかる。

通常のシラバス点検および授業英語化シラバス点検とともに、チェックの入っていない教育担当部局のいくつかで前年度に点検作業を行ったため今年度は行っていないという趣旨の記述が見られるが、義務化されているFD活動の一環としてのシラバスチェックは例え開講科目、科目体系に変更がなくとも毎年実施すべきものであるという認識共有が求められる。また、多くの学類でシラバス点検について、学類会議、教務・学生委員会などを中心に組織的に確認している一方で、個人レベルでの点検実施や、誰がどこで点検したのかが明記されていないケースがいくつか見られたことは今後の課題であると考える。

照会事項3 授業方法・カリキュラム改善のための取組み等の実施状況

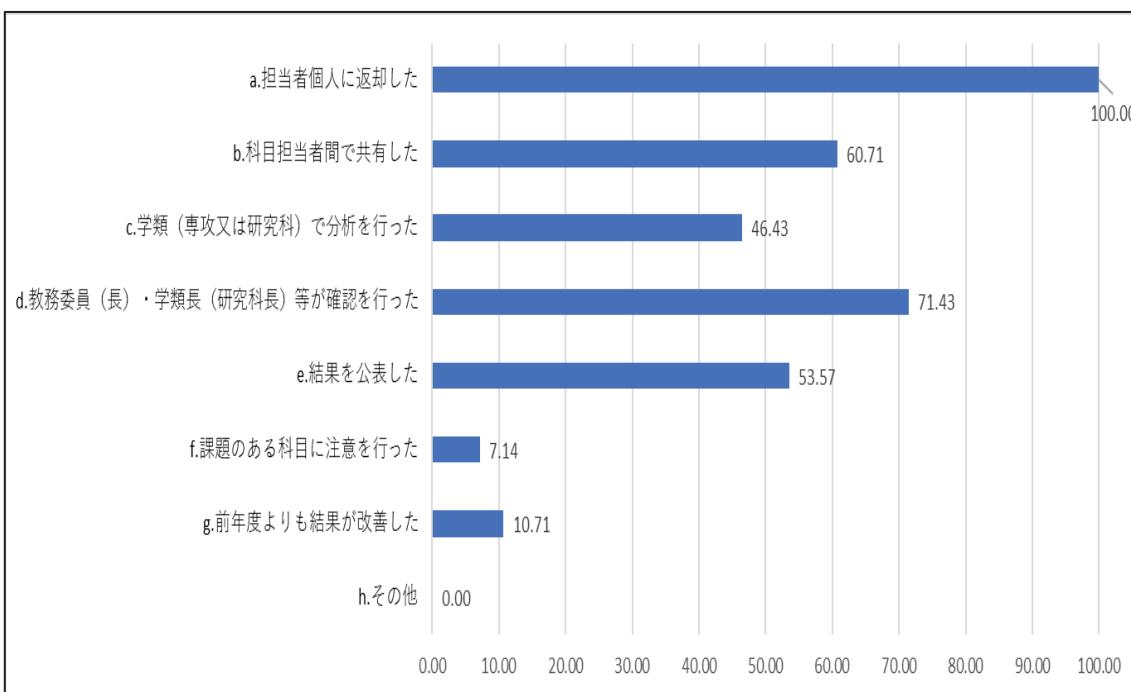
【検証事項1】授業評価アンケート及び卒業・修了者に対するアンケートの結果を、授業方法・カリキュラムの改善のために、どのように活用したか。

1) 授業評価アンケート

授業評価アンケートの結果をどのように授業改善に活用したかでは、「担当者個人に返却した」、「科目担当者間で共有した」、「学類（専攻又は研究科）で分析を行った」、「教務委員（長）・学類長（研究科長）等が確認を行った」、「結果を公表した」、「課題のある科目に注意を行った」、「前年度よりも結果が改善した」、「その他」について回答を求めた。

各項目のチェック率は図表1-2-3のとおりであるが、「担当者個人に返却した」が100%となっているほか、多くの部局において「教務委員（長）、学類長（研究科長）等が確認を行った」にチェックが入っている。今後、さらに、授業評価アンケート結果の利活用を促していく必要がある。

図表1-2-3 各項目のチェック率（回答母数：28）



「学類（専攻又は研究科）で分析を行った」、「結果を公表した」で半数前後、「課題のある科目に注意を行った」、「前年度よりも結果が改善した」においては、少数の教育担当部局でしか実施されておらず、さらなる改善を行う必要がある。

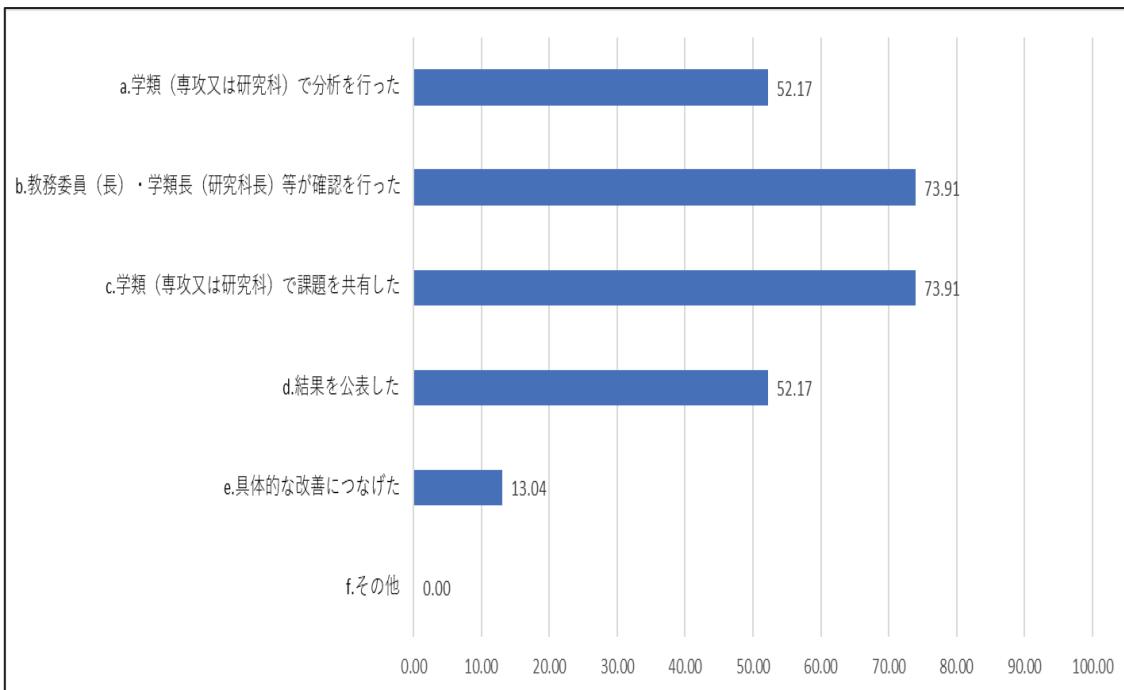
1－2 各部局等からの回答をもとにした点検

2) 卒業・修了者に対するアンケート

卒業・修了者に対するアンケートに関しては、「学類(専攻又は研究科)で分析を行った」、「教務委員(長)・学類長(研究科長)等が確認を行った」、「学類(専攻又は研究科)で課題を共有した」、「結果を公表した」、「具体的な改善につなげた」、「その他」について回答を求めた。

各項目のチェック率は図表1-2-4のとおりであるが、人文学類、法学類すべての項目にチェックが入っているほか、多くの部局において「教務委員(長)、学類長(研究科長)等が確認を行った」「学類(専攻又は研究科)で課題を共有した」にチェックが入っている。今後、さらに、卒業・修了者アンケート結果の利活用を促していく必要がある。

図表1-2-4 各項目のチェック率(回答母数:23)



卒業・修了者に対するアンケート結果の確認、共有は一定程度行われているが、具体的な分析や改善につなげることについて課題を残している。

【検証事項3】教員相互の授業参観(遠隔授業の参観を含む)

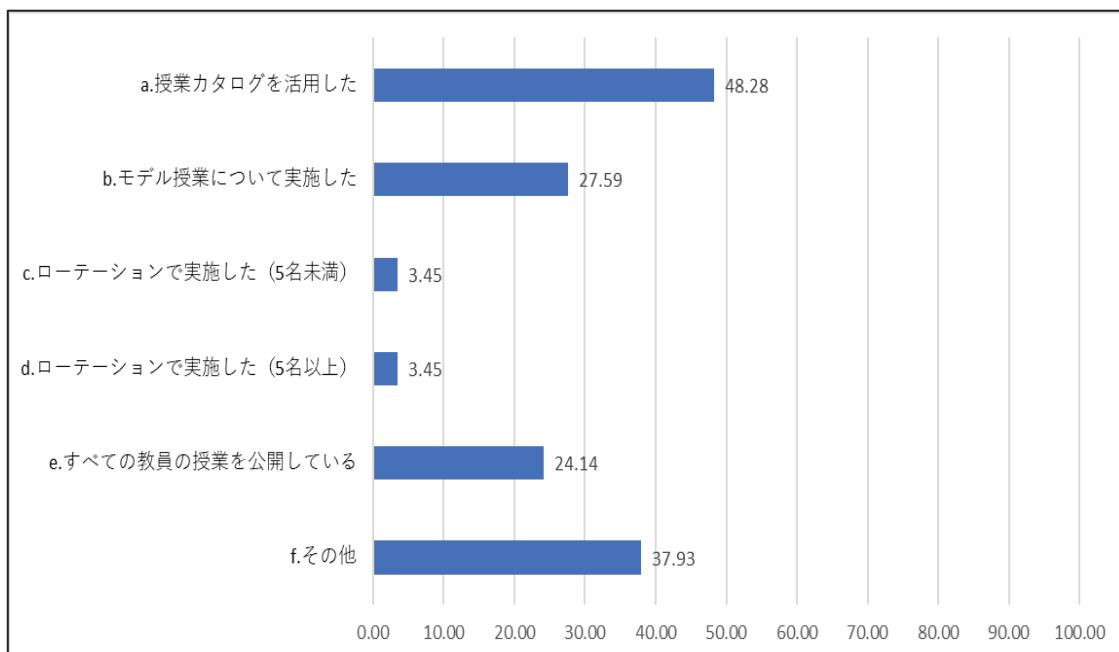
遠隔授業の参観を含む教員相互の授業参観に関しては、「授業カタログを活用した」、「モデル授業について実施した」、「ローテーションで実施した(5名未満)」、「ローテーションで実施した(5名以上)」、「すべての教員の授業を公開している」、「その他」について回答を求めた。

「授業カタログを活用した」「モデル授業について実施した」「すべての教員の授業を公開している」について、一定程度の取組が見られるが、授業参観という形態でのFDには改

1－2 各部局等からの回答をもとにした点検

善が必要である。一方で、ほかの設問への回答とは大きく異なり、4割近くの教育担当部局が「その他」にチェックをつけ、各部局特有の工夫を施した多様な取組についての回答がなされている。

図表1-2-5 各項目のチェック率（回答母数：29）



照会事項4 成績評価基準等の作成・検証状況

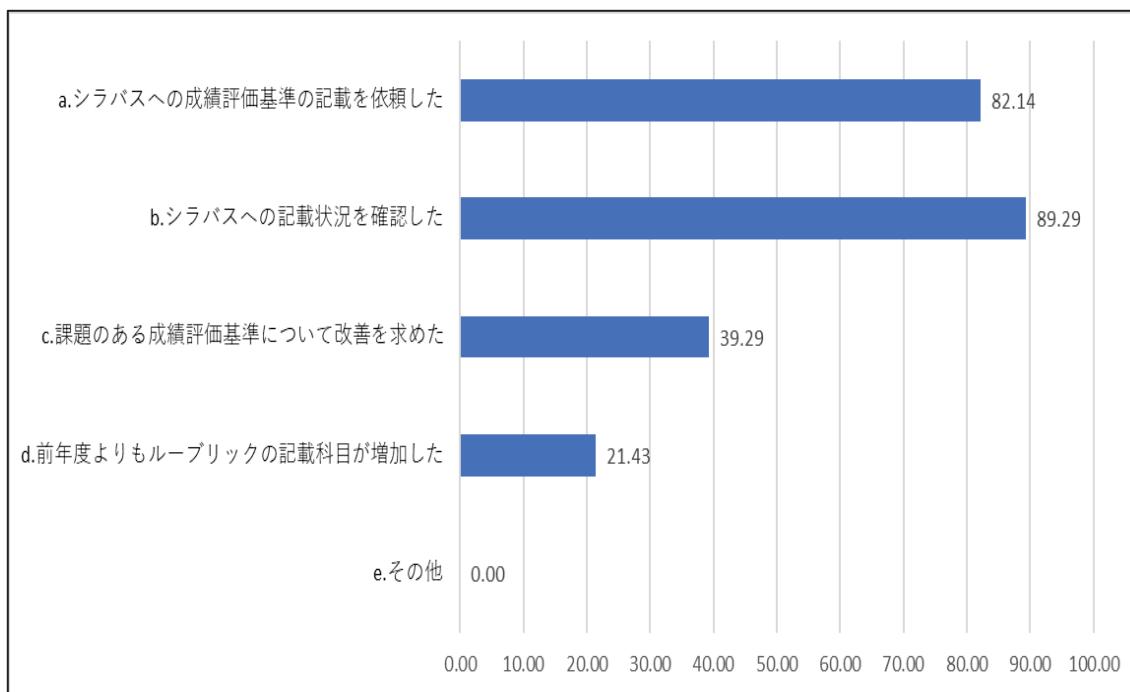
【検証事項1】令和4年度の実施状況

1) 成績評価基準等の作成・検証

成績評価基準等の作成・検証では、「シラバスへの成績評価基準の記載を依頼した」、「シラバスへの記載状況を確認した」、「課題のある成績評価基準について改善を求めた」、「前年度よりもループリックの記載科目が増加した」、「その他」について回答を求めた。

各項目のチェック率は図表1-2-6のとおりであるが、人文学類、法学類、国際学類、薬学類、保健学類、国際基幹教育院外国語教育部門では、全ての項目にチェックがつけられており、成績評価基準に対する積極的な取り組みがうかがえる。一方で、1項目にしかチェックのつけられていない教育担当部局もいくつか見られることは課題である。

図表1－2－6 各項目のチェック率（回答母数：28）



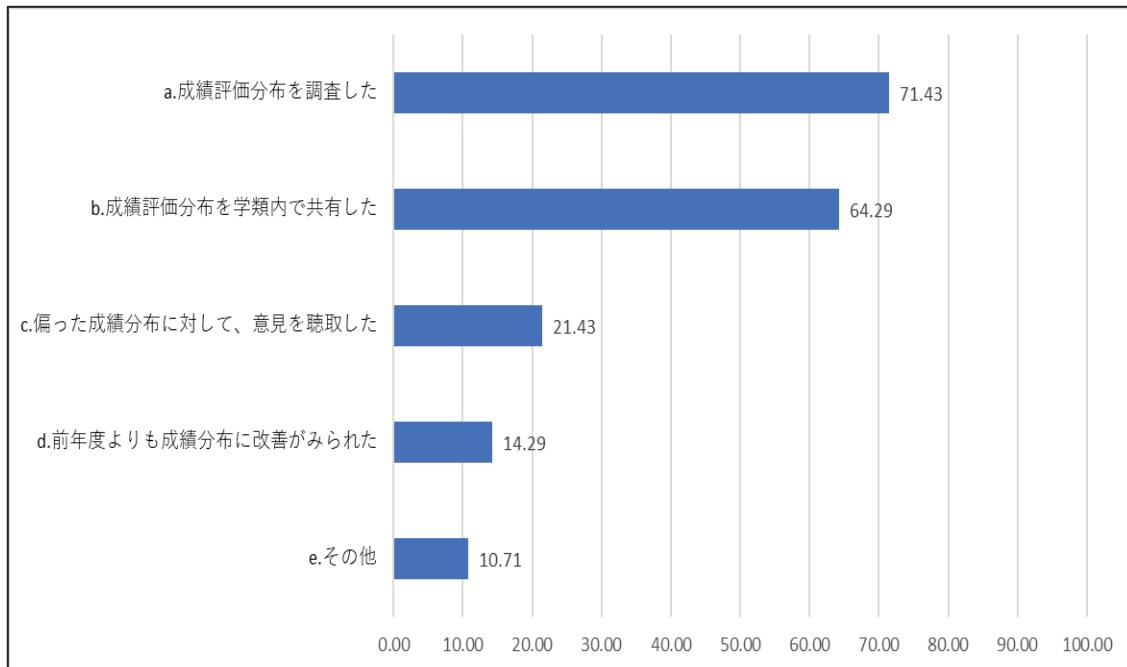
「課題のある成績評価基準について改善を求めた」，「前年度よりもループリックの記載科目が増加した」の数値が低い。ループリックについては科目特性の問題，既に多くの科目で記載されている可能性があるためある程度は仕方ないといえるが，課題のある成績評価基準については恒常的なシラバス点検体制の中で可及的速やかに改善されることが望ましく，FDとして課題である。

2) 成績評価方法の検証

成績評価方法の検証に関しては，「成績評価分布を調査した」，「成績評価分布を学類内で共有した」，「偏った成績分布に対して，意見を聴取した」，「前年度よりも成績分布に改善がみられた」，「その他」について回答を求めた。

各項目のチェック率は図表1－2－7のとおりであるが，法学類，生命理工学類・自然システム学専攻，法学研究科（修士課程・専門職学位課程）では，全ての項目にチェックが入っており，成績分布への関心が高いことがうかがえる。一方，1つしかチェックのない教育担当部局も少數ではあるが存在していることは課題である。成績をつけるのは教員の専権事項ではあるが，あまりに偏りのある成績分布は好ましくないという成績分布に関する認識共有を進める必要性が認められる。

図表1-2-7 各項目のチェック率（回答母数：28）



「成績評価分布を調査した」「成績評価分布を学類内で共有した」が高い数値を示しており情報共有は浸透していることがわかる。しかし、「偏った成績分布に対して、意見を聴取した」は2割程度、「前年度よりも成績分布に改善がみられた」は2割満たない程度と低い数値となっており、成績分布に関する組織的関与に課題を残している。「その他」では、回答選択肢とは異なるが成績分布への異なるアプローチの工夫が行われていると思われる。

照会事項5 FD研修会の実施状況

融合学域、医学類をはじめとして、部局独自のFD研修会を創意工夫しながら開催しており、好ましい傾向である。組織改組やカリキュラム改善等を行った部局においては、直面する新しい課題について、FD研修会のテーマに掲げられている。対面及びオンラインを含めた教授法、学修支援ツールの使い方、研究指導、学生の心のケア、留学生対応など、幅広いテーマが話題となっている。これらの部局主催FD研修会の中には、教育、研究に関して共有可能なテーマのFD研修会については全学に公開・広報されることが望まれる。

今後の課題

今回、教学マネジメントの観点から、シラバスにおける学修目標・学修成果の記載状況、講義スケジュール（授業計画）の記載状況を新たに点検することにしたこと、さらには、卒業・修了者アンケート結果等を活用しながら、授業改善だけではなく、学位プログラムレベルのカリキュラム改善に着目するようにしたことから、照会事項の改善充実を図った。それらを踏まえて、照会事項1～5の回答を総括し課題について指摘したい。

シラバス改善のための取組みの実施状況に関して、学修目標・学修成果、講義スケジュール、AL 関連の記載および英文での入力の状況については大半の教育担当部局で確認が行われていた。一方で、個人レベルでの点検実施や、誰がどこで点検したのかが明記されていないケースがいくつか見られたことなど、シラバスの組織的・恒常的な点検体制が構築されていない教育担当部局があることも判明しており、今後の課題であると考える。

次に、授業方法・カリキュラム改善のための取組み等の実施状況では、授業評価アンケートおよび卒業・修了者アンケート結果を積極的に活用している教育担当部局があることが明らかになったが、授業評価アンケート結果で課題のある科目への対応が十分に行われていないこと、および、それに関連するが、前年度よりも結果が改善しているケースが少ないこと、卒業・修了者アンケート結果の分析、それを反映した改善活動が不十分であること、授業参観が不活発であること、課題のある成績基準改善が十分進んでいないこと、偏った成績分布への対応が不十分であること、など、今後の課題も見えてきた。

教員相互の授業参観については、Web 上で確認できる授業カタログの活用は一定程度進んでいることが確認できたが、具体的な授業参観についてはまだまだ低調であることも判明した。ただし、授業参観以外の多様な形態での教員間での情報共有、情報公開は実施されていることが「その他」への回答から見て取れるため、今後の改善充実に活かしていきたい。

成績評価基準等の作成・検証状況に関しては、成績評価分布の部局内での共有は進んでいるが、偏った成績分布への対応が不十分な点が明らかになっている。このことは、成績評価に関する組織的な関与について、更なる改善充実を進める必要がある。

学修目標・学修成果を明確にしたシラバス作成、それに基づく授業実施および成績評価、授業評価アンケートおよび卒業・修了者アンケート結果による改善がよりよい授業を作る上での PDCA サイクルであり、今後の改善が一層必要であることが、今回の照会事項への回答から明らかになった。

今後は、各教育担当部局（特にチェックが少なかった部局）において、このサイクルの重要性をしっかりと認識し、学生により力をつけさせることができる教育を提供出来るよう努めることが望まれる。これらの課題については、前年度の取組を踏まえた改善計画と今年度の自己評価及び総評において認識されている事項であり、今後の改善につなげられる可能性がうかがえる点は好ましい傾向であると言える。毎年のように新たな課題が出てくるが、教育担当部局として学修者重視の姿勢の下、教員間での認識を共有し、課題、解決方法を組織として検討するという体制を構築・維持していくことが、自己評価 4（大いに評価出来る）につながると考えられる。

1-3 FD 委員会の活動

令和4年度における活動		
令和4年4月4日	(月)	令和4年度第1回全学FD研修会「新任教員説明会<教育・学生編>」開催
令和4年7月15日	(金)	第1回FD委員会開催
令和4年7月29日	(金)	第2回FD委員会開催（書面附議）
令和4年8月8日	(月)	第2回全学FD研修会「ピア・サポートを活用した学修者本位の教育の実現」開催
令和4年9月28日	(水)	第3回全学FD研修会「金沢大学EMI科目（英語による科目）の現状と今後の展望」開催
令和4年10月28日	(金)	第4回全学FD研修会「FD活動報告書成果発表会」－学類等における組織的FDの取組事例－開催
令和4年12月22日	(木)	教学マネジメントセミナー2022「教学マネジメントのあるべき姿を考えよう！～自律的学修者を育てるために～」開催 （「知識集約型社会を支える人材育成事業」幹事校企画）
令和4年12月23日	(金)	第3回FD委員会開催
令和5年1月18日	(水)	第4回FD委員会開催
令和5年2月27日 ～3月24日	(月) ～ (金)	英語による授業担当者のためのFD研修会開催
令和5年3月10日	(金)	令和4年度数理・データサイエンス・AI教育FD研修会開催（教育企画会議主催）
令和5年3月14日	(火)	令和4年度「知識集約型社会を支える人材育成事業(DP)」採択校合同シンポジウム「知識集約型社会における新しい大学教育の姿～文理融合という横糸と高大院接続という縦糸で織りなす人材育成～」開催 （「知識集約型社会を支える人材育成事業」幹事校企画）

- 各委員会の協議・報告事項及び議事要旨については下記にて公開している。
 「アカンサスポータル」→「業務」→「業務マニュアル等リンク集」→
 「会議」→「学内会議の議事要旨等」
<https://manual.w3.kanazawa-u.ac.jp/index.php/gakunaikaigi/>（学内限定）
- 各研修会（英語による授業担当者のためのFD研修会は除く。）の動画又は資料については本学ポータルサイト（アカンサスポータル）にて公開しているので、教職員は隨時閲覧可能である。

【研修会】**令和4年度第1回全学FD研修会「新任教員説明会<教育・学生編>**

主 催	教育企画会議専門委員会 FD 委員会及び教学マネジメントセンター
日 時	令和4年4月4日（月） 10時00分～11時55分
会 場	総合教育講義棟2階 A1 講義室
対 象	前年度研修会（令和3年4月2日開催）以降に本学に採用された教員を中心とし、関心のある教員や学生系職員の参加も可能
参 加 者	各 57名
概 要	<p>新任教員を主な対象とする全学の研修会は、平成20年度から毎年度開催している。従来は、「教養教育担当に関する初任者研修」（共通教育機構が実施、平成16～18年度）、「新任教員等研修会（兼共通教育担当に関する研修会（初任者対象））」（教育担当理事と共通教育機構長の連名で実施、平成19年度）として開催してきた。</p> <p>本学における授業支援体制と学生支援の取組を把握することで、教育体制全般に対する理解を深めることを目的とする。</p>
プログラム	<ul style="list-style-type: none"> (1) アカンサスポータル及び教務システムの活用 (森 祥寛 学術メディア創成センター 助教) (2) 学生指導と支援（片岡 邦重 学長補佐（教育改革・学修支援担当）） (3) 学生の心のケア及び学生相談（足立 由美 保健管理センター 教授） (4) FD及びシラバス (林 透 教学マネジメントセンター)
アンケート結果抜粋	<ul style="list-style-type: none"> ・本学の学生に対するサポート体制が理解できました。先生方と協力しながらサポートしていくよう、学生のケアに関する内容について、今後も情報を得ていきたいと思いました。 ・大学→学部→専攻のポリシーに応じた授業設定の重要性を再確認した。

**第2回全学FD研修会 「ピア・サポートを活用した学修者本位の教育の実現」
（「知識集約型社会を支える人材育成事業」幹事校企画）**

主 催	「融合した専門知と鋭敏な飛躍知を持つ社会変革先導人材育成プログラム」運営委員会
共 催	教育企画会議専門委員会 FD 委員会・教務委員会
日 時	令和4年8月8日（月） 14時～16時00分
会 場	Zoomによるオンライン開催
参 加 者	131名（他大学の参加者を含む）
概 要	ピア・サポートの基礎概念を学ぶとともに、教育・学修実践においてどのように役立てができるかについて幾つかの事例紹介を交えつつ、学生同士の学び合いの意義や価値に関する理解を深める機会を設ける。
プログラム	<ul style="list-style-type: none"> 内容 ・基調講演「ピア・サポートの基礎概念とその効用」

1-3 FD 委員会の活動

	(講師：松下 健 北陸学院大学 人間総合学部 社会学科 准教授) ・事例紹介 「附属図書館における学修支援スタッフ (LiLA) の経験を通して」 (田中 裕士 金沢大学大学院自然科学研究科 電子情報科学専攻 D3) 「アカデミック・アドバイジングによる学修支援の経験を通して」 (中野 正俊 金沢大学 高大接続コア・センター 特任助教) 「先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) で目指す学修支援モデル」 (山下 貴弘 金沢大学 教学マネジメントセンター 特任助教) ・意見交換・クロージング
アンケート結果抜粋	・本研修会では、様々な立場の方によるそれぞれの経験に基づいたお話を拝聴することができ多角的な学びが得られました。 ・我々教員もピア・サポート的な活動をしていることに気が付くとともに、組織的に学生を主体として取り組むことの有用性を感じました。

第3回全学FD研修会 「金沢大学EMI科目（英語による科目）の現状と今後の展望」

共 催	教育企画会議専門委員会 FD 委員会・教務委員会、スーパーグローバル大学企画・推進本部、国際基幹教育院外国語教育系
日 時	令和4年9月28日（水） 13時30分～14時30分
会 場	総合教育講義棟2階A1講義室への出席またはZoomによるオンライン参加
参 加 者	87名
概 要	金沢大学では、SGUプロジェクトの一環として、これまで授業の英語化に取り組んできた。SGUプロジェクトも残すところ1年となり、これまでのEMI科目の状況を振り返ると共に、今後大学として、どのように授業の英語化に取り組んでいくのか、考える時期に来ている。 そこで、このFD研修では、まずこれまで外国語教育系が行ってきた学内EMI専門科目に関する共同研究結果の一部を報告し、EMI科目の現状を共有する。次に、通常授業内では授業の英語化が難しく、オンラインによる授業の英語化を目指す学類への情報提供として、オンライン英語授業はどのような英語力の学生に有効なのか、コロナ禍でのオンラインGS言語科目に関する研究結果から報告する。最後に、SGU最終年に向けてもう一押しEMI科目を増やす場合、EMI推進教員でなくとも取り組める開講アイディアを紹介し、全体討論へつなげる。
プロ グ ラ ム	・報告 学内EMI科目に関する共同研究結果の報告（教員と学生へのアンケート調査） BROWN DALE COLIN（国際基幹教育院外国語教育系 准教授） 学生インタビューから見える事 (EMI科目に関する学生コメントの紹介) (菅野 磨美 国際基幹教育院外国語教育系 助教) オンライン教材を使った学生英語力の伸びに関する研究結果の報告 (GS言語科目を例に) (家口 美智子 国際基幹教育院外国語教育系 教授) ・アイディア紹介 EMI科目の実施アイディア (大藪 加奈 国際基幹教育院外国語教育系 教授)



アンケート 結果 抜粋	<ul style="list-style-type: none"> ・EMI 科目に対する学生の状況がよく理解できました。 ・さまざまなスタイルの EMI の提案はあります。反転授業を進めたいと思います。
----------------	---

第 4 回全学 FD 研修会 FD 活動報告書成果発表会

主 催	教育企画会議専門委員会 FD 委員会, 教学マネジメントセンター
日 時	令和 4 年 10 月 28 日 (金) 13 時 30 分～15 時 45 分
会 場	Zoom によるオンライン開催
参 加 者	61 名
概 要	金沢大学では、毎年部局ごとの組織的なファカルティ・ディベロップメント(FD)活動について「金沢大学 FD 活動報告書」としてまとめ、公開することで、活動の共有と振り返りを図っている。令和 3 年度 FD 活動報告書においては、学問分野の特性に応じた活発な取組みを紹介しており、部局を越えて参考になる事例が多い。今回、今回、先導学類、学校教育学類、地域創造学類、フロンティア工学類、電子情報通信学類及び薬学類（創薬科学類）における FD 活動を全学的に共有する。
プロ グラム	「FD 活動報告書成果発表会」－学類等における組織的 FD の取組事例－ (アシリテーター：堀井 祐介 教学マネジメントセンター 教授)
アンケート 結 果 抜 粋	<ul style="list-style-type: none"> ・各学類の特色ある取組みを聞くことができ、参考になりました。。 ・自分の学類でも役にたつと思われた。

英語による授業担当者のための FD 研修会

主 催	授業科目英語化に関する WG, 教育企画会議専門委員会教務委員会, 教育企画会議専門委員会 FD 委員会
概 要	本研修会は、英語による授業科目の拡充の取組の一環として、英語で教えるために必要な英語表現、スキル、手法を学ぶことに特化した内容を実施する。
会 場	オンライン開催
参 加 者 数	延べ 38 名
日 時	令和 5 年 2 月下旬～3 月 各コースにつき 1～2 日 (6 時間)
プロ グラム	<ul style="list-style-type: none"> ・講義とプレゼンテーション (導入) ・講義とプレゼンテーション (発展) ・少人数クラスのプランニングとマネジメント ・アカデミックライティング (導入)

	<ul style="list-style-type: none"> ・ゼミとディスカッショングループ ・発音と Global Englishes
アンケート 結果抜粋	<ul style="list-style-type: none"> ・議論をリードするために使用する多くの定型文を学ぶことが出来た上に、短時間であるトピックについての自分の考えを英語でまとめる訓練ができた。 ・普段見逃しやすい英語の重要なところを再度スキルアップできるきっかけになった。 ・論文の構造を改めて学べたので、卒論指導でも活用できそうと思いました。

令和4年度「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」採択校合同シンポジウム
「知識集約型社会における新しい大学教育の姿～文理融合という横糸と高大院接続という縦糸で織りなす人材育成～」（「知識集約型社会を支える人材育成事業」幹事校企画）

主 催	金沢大学（幹事校）、新潟大学、信州大学、大正大学、東京都市大学、麻布大学、千葉大学、早稲田大学、名古屋商科大学
日 時	令和5年3月14日（火） 13時00分～15時00分
会 場	対面、Zoomによるハイブリッド開催
参 加 者	127名（他大学の参加者を含む）
概 要	文部科学省「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」は、今年度で事業3年目を迎える。メニューI・II採択校にとっては中間評価の年度に当たる。本シンポジウムは本事業が折り返し地点に差し掛かる中で、知識集約型社会における大学が果たすべき使命や役割、さらには、求められる人材育成のあるべき姿について改めて見つめ、考える機会を設け、今後の事業取組の更なる発展に繋げることを目的に、採択校9大学が共同主催する。
プログラム	<p>内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「文理横断・文理融合教育の行方～中央教育審議会大学分科会大学振興部会の議論を踏まえて～」（講師：川嶋 太津夫 大阪大学スチューデント・ライフサイクルサポートセンター長・特任教授） ・「知識集約型社会に求められる人材育成とは～文理融合・高大院接続の観点から～」（講師：野村 純 千葉大学教育学部アジア・アセアン教育研究センター長・教授） ・意見交換・クロージング 
アンケート 結果抜粋	<ul style="list-style-type: none"> ・千葉大学のリアルな学びの在り方とそれがどのように組み立てられているのかの一端に触れることができました。 ・様々な先進的な取り組みについて知ることができ、非常に有益なご講演でした。 ・文理融合教育の現場の状況がよくわかりました。 ・千葉大学の高大院接続の優れた取組がよくわかり参考になりました。

1-4 <ピックアップ>特色あるFD活動

令和4年度における全学及び各部局等のFD活動は種々実施され、全学のFD研修会（1-3）及び各部局等のFD研修会（後掲：2-5）も多数実施された。

その中で、特色あるFD活動を各々1つピックアップし、紹介する。

【学域等及び研究科単位】

学域（人間社会学域、理工学域、医薬保健学域）、研究科（人間社会環境研究科、自然科学研究科、医薬保健学総合研究科）、国際基幹教育院で実施している特色あるFD活動は次のとおり。

部局名	FD活動
人間社会学域	<p>令和4年度は人間社会学域として2回のFD研修会を実施した。</p> <p>第1回目は、令和4年9月29日に学校教育学類以外の教職課程認定を受けている学類を対象に、「教職課程履修指導の17のポイント」と題し、教職に関するWG座長を講師に、教員免許取得のための基本的な履修指導ができることを目指した研修を行った（出席者数：教員24名、事務職員7名）。</p> <p>第2回目は、令和5年2月17日に、国際教育のひとつとして海外とのネットワークによるオンラインを利用した「COIL(Collaborative Online International Learning)型教育」についての研修会を実施した。</p> <p>最初に、信州大学・仙石祐先生によるCOIL型教育の定義・発展、並びに国内動向や先端事例の解説が施された。引き続き本学の事例として、ドイツとの協働運営に関する準備や実際の授業における学生の反応、授業内外における5事例から得られたCOIL型教育推進に関する気づき・課題、簡素なステップとして国際交流の延長としての促しについての紹介がなされた（出席者数：教員22名、事務職員2名）。</p>
理工学域 自然科学研究科	<p>理工学域・自然科学研究科では、3月27日（月）13時からオンラインにて第14回理工FDシンポジウムを開催した。新型コロナにより各教員は様々な授業形態のスキルを身につけてきた。これから、様々なオプションの中でどの講義形態を活用するかの判断が重要になってくると考え、「授業形態と学習効果」の関係を考えるシンポジウムを開催した。参加者は70名であった。本シンポジウムでは、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員からの事前アンケート ・特別講演 <p>の2つを軸とした。まず事前に教員からご自身の授業形態に関するアンケートを実施し、教員間で現状を共有した。その後、芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター教授 榊原暢久先生に、「対面授業とオンライン授業の二項対立からオンラインを活用した授業へ」という題目で特別講演をいた</p>

1－4 <ピックアップ>特色あるFD活動

部局名	FD活動
	だき、対面かオンライン化という二項対立を超えて、学生がいかに学ぶかを優先事項におき、オンラインを活用した授業の可能性について具体的な例を挙げてもらいながら、来年度以降の講義でやってみたいことを参加者と意見交換を行った。
医薬保健学域 医薬保健学総合研究科	医薬保健学域医学類及び医薬保健学総合研究科医学系では、医学類FD委員会が中心となり、医学系FD研修会を今年度に計13回開催した。研修会の対象は、主に医学系及び附属病院、保健学系の教員である。開催形式は、新型コロナウィルス感染症の蔓延により、昨年度同様に完全オンラインで実施した。研修会の内容は、医学類の教育理念・3つのポリシー・カリキュラム、アクティブ・ラーニング手法、ウィズコロナでの講義・臨床実習、教職協働、DX、学生評価、シラバス、授業の英語化、学生支援、患者安全、医学教育モデル・コア・カリキュラム改訂といった医学教育に関する広範なテーマを扱った。研修会の講師として、学外の医学教育専門家や学内の様々な部署に御講演いただいた。結果的に、今年度の医学系FD研修会の参加者数は延べ502名となり、過去最多を記録した。また、研修会を当日に受講できない参加者に対しては、LMS上での医学系FD研修会のオンデマンド配信を継続している。
人間社会環境研究科	令和4年度はFD研修会の回数を増やし取組みを強化した。第1回FD研修会(令和4年7月4日、31名参加)では、QEの新制度についての指導方法についてアメリカの大学院制度と比較した報告を元にして議論を行い、QEでの学生指導について検討を行った。また、第2回FD研修会(令和4年8月24日、31名参加)では、大学院修了後の進路について人材派遣会社担当者からの見解報告を聞き、教員との意見交換を行うことにより、学生への進路指導に役立つ情報を共有し教員間で議論した。また、大学院進学に関する学生意識調査を人間社会学域の全学類の学生と、人間社会環境研究科博士前期課程及び法学研究科法学・政治学専攻の在学者に対して令和4年12月に実施した。意識調査アンケートの結果について、第3回FD研修会(令和5年3月8日、41名参加)を開催して結果の分析を行い、現状の把握と将来の課題について情報共有することができた。
国際基幹教育院	国際基幹教育院は、スキルアップセンターの廃止に伴い、国際基幹教育院FD委員会を2022年度に設立した。国際基幹教育院は、GS教育系と外国語教育系から成り、共通教育という大きな枠組みを共有しながら一般教養科目と語学科目という個別の枠組みを有している。GS教育系FDと外国語教育系FDが融合した国際基幹教育院FD委員会では、各系と共に催す形でFDを実施することとし、可能な限り互いの系に還元できるテーマでFDを実施することを目指した。GS教育系は医薬保健、理工、社会科学や芸術まで全学術領域を網羅して

1－4 <ピックアップ>特色あるFD活動

部局名	FD活動
	<p>おり、他の学類と比較すると科目の多様性・個別性・特殊性が非常に強い。また、外国語教育系はTOEIC、EAP、初習言語と分かれ、特に初習言語は英語学修とは異なる個別性がある。そのような中、2系で共有できるテーマとして、本年度は3回の国際基幹教育院FD研修会を実施した。</p> <p>総合教育部は国際基幹教育院内に設置されており、文系・理系一括入試に合格した学生が1年間所属する組織である。総合教育部の学生は1年次の間に移行先学類を決めるため、不安や悩みを抱える学生が多数存在する。総合教育部では担任教員とアカデミック・アドバイザーが、定期面談や個別相談を通して総合教育部学生の学生生活や学類移行を支える体制を取っている。今後の活動としては、総合教育部の円滑な運営を補助するFDを教員と学生を対象に行っていきたいと考えている。</p> <p>■第1回国際基幹教育院FD（令和4年10月13日、21名参加）</p> <p>障がいのある学生の受講にあたり、どのような対応が求められるのか、どこまでの配慮をする必要があるのか等、支援を考える際に基本となる考え方を障がい学生支援室の委員であるGS教育系の濱田里羽先生が講演し、意見交換を行った。</p> <p>■第2回国際基幹教育院FD（令和4年12月15日、26名参加）</p> <p>オンライン形式で「健康科学」を受講した経済学部の学生（当時1年生）が統計を基盤とした医学研究に興味を抱き、GS教育系唐島准教授の指導の下で研究活動を開始した。その研究成果が翌年に査読を有する国際医学雑誌に掲載された事例について報告され、意見交換を行った。</p> <p>■第3回国際基幹教育院FD（令和5年2月21日、98名参加）</p> <p>厚生労働省は睡眠分野における国民の健康づくりのための取組として、「健康づくりのための睡眠指針2014」を策定しているが、教育現場において睡眠の重要性はどれだけ理解されているか疑問である。教育者や研究管理責任者が最新の科学的な睡眠に対する知識を持つことは、質の高い教育力の持続や研究の実行力や完遂性を高めることにつながる。米国スタンフォード大学医学部精神科教授・スタンフォード睡眠・生体リズム研究所所長である西野精治先生により、睡眠と健康に関連する研究成果が発表され、意見交換が行われた。</p> <p>■【大学コンソーシアム石川】教職員研修専門部会 令和4年度FD・SD研修会（令和5年3月8日）</p> <p>学域GS科目の英語教材の活用、英語で実施する一般教養科目の難しさ、可能性、工夫についてGS教育系の小林恵美子教授、菊谷まり子准教授が講演した。</p>

【学類単位】

今回は、人文学類、国際学類、地球社会基盤学類、保健学類及び国際基幹教育院で実施している特色あるFD活動を紹介する。

○人文学類

取組名称	人文学類FD研修会
開催日	令和4年10月19日
参加人数 (概数)	延べ30人

附属図書館ライティングセンター、クォン・ヒージョン先生に講師をお願いし、英語レポート・ライティング指導法の講習会を実施し、あわせてライティングセンターの利用案内と指導事例の紹介をしていただいた。当日は高山学類長以下、およそ30名の教員が参加した。

初めに情報部情報サービス課の橋課長から金沢大学附属図書館ライティングセンターの概要と利用案内について説明していただいたのち、クォン先生の方から、学生に英文レポートを作成させ、それを適切に添削する際のポイントなど、実践的な指導法を講習していただいた。また、附属図書館ライティングセンターの利用法や各教員の授業との連携策等を知ることができたのも有益だった。講演後、質疑応答を行った。



当日のクォン先生の講演の様子

○国際学類

取組名称	国際連携教育としてのCOIL/VE型授業の事例紹介
開催日	令和5年2月17日（金）
参加人数 (概数)	24名

人間社会学域では、国際教育のひとつとしてCOIL (Collaborative Online International Learning) 型授業の試行を検討しており、当該内容をテーマに学域FD委員会を主催、国際学類も共催という形でFD研修会を開催した（人文学類も共催）。

COIL型とは、海外とのネットワークによるオンラインを利用した教育形態であり、一部の国内大学でも取り組まれているが、本学でもCOILに関する緩やかな解説のもとで（VE : Virtua Exchange の一形態として）、経験のある教員により、これからの取り組みの参考として、いくつかの事例を中心として研修を行った（国際学類から、専任教員1名、準専任教員1名から事例紹介を行った）。

国際学類として、授業科目内での部分的な国際教育の可能性という点などからも、今後、積極的に取り組んでいく予定である。

狭い意味でのコイル (Collaborative Online International Learning)

- ・海外の大学との共同・連携授業
- ・同じ教育目標に立っている
- ・正規のカリキュラム上に位置付けられている
- ・オンタイムで双方向
- ・学生が主体的に参画する授業方法



○地球社会基盤学類

取組名称	地球社会基盤学類 FDシンポジウム
開催日	令和4年10月31日 2限 (10:30~12:00)
参加人数 (概数)	25人

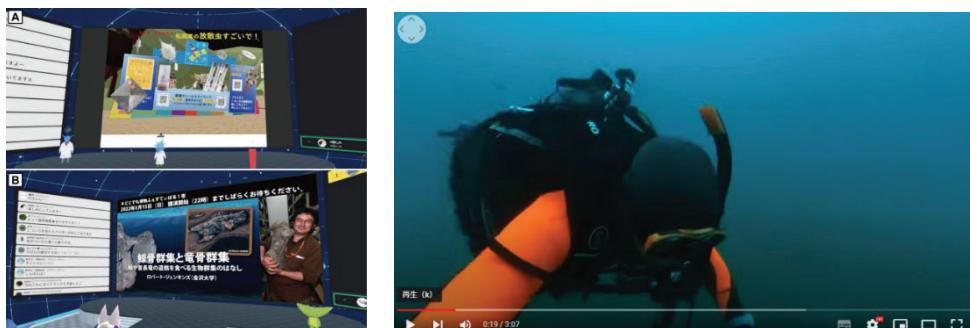
今年度はオンライン（Zoom）にて学類 FD シンポジウムを開催した。テーマは「DX」とし、授業に DX を取り入れている教員からの話題提供、学類内優秀教員の講演、JABEE 関連の情報共有を行った。

●教育を中心とした DX の取り組み 西山宣昭 教授

8月31日に Zoom にて開催された学術メディア創成センターシンポジウム 2022 「メタバースを活用した教育 DX」の配信済み動画を視聴した。

●DX に関する話題提供 ジェンキンズ ロバート 准教授

- ・VR 空間（cluster）における一般講演（アバター利用の双方向性のある VR 環境での講演）
- ・360° 映像による任意視点の海中フィールドワーク
- ・福井バーチャル恐竜展について
- ・DX によるフィールド実習の可能性について



●優秀教員による話題提供（その1） 山口裕通 助教

データサイエンス科目（確率統計学）において、Python や Google Colab を活用したプログラミングを併用した授業の進め方について講演があった。

●優秀教員による話題提供（その2） 高山雄貴 准教授

研究室におけるゼミ、ミーティングの進め方として、学生が主体となった運営することにより、プレゼンテーション能力が向上した旨の講演があった。また、コロナ禍において、Gather town を活用したゼミのオンライン化を試行したアイデアについても説明があった。

●JABEE 関連の情報共有 由比政年 教授

JABEE評価に必要な卒業者アンケートの結果について説明があった。

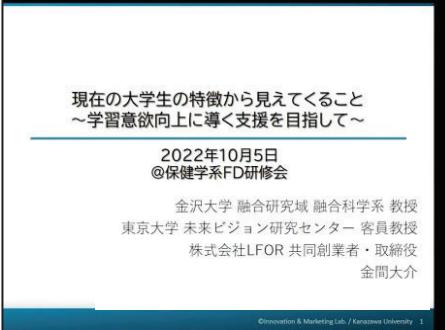
○保健学類

取組名称	令和4年度第1回保健学系FD研修会
開催日	令和4年10月5日（水）
参加人数 (概数)	65名

令和4年度に保健学類では「学習意欲向上に導く支援」「こころの健康とゲートキーパー」「ハラスメント防止」に関するFD研修会を実施した。

第1回は、融合研究域融合科学系の金間大介先生に「現在の大学生の特徴から見えてくること～学習意欲向上に導く支援を目指して～」と題してご講演いただいた。現在の若者を象徴する「いい子症候群の若者たち」の特徴や行動の傾向を紹介いただき、学生の自律的学習意欲を向上させるために、自己成長を実感できる支援を行っていくべきであるという点をご提案いただいた。本学類の学生は、各種医療関係職種の国家試験合格を目指しているという点に独自性があるが、国家試験合格だけでなく、学生が自ら学び考える意欲や態度を育めるような支援を目指す必要性を改めて認識した。

また、令和4年度も学生が選ぶ「優秀教育教員表彰」を実施した。この制度が学生の自律的学習意欲を高める教育の実践につながっている。



現在の大学生の特徴から見えてくること
～学習意欲向上に導く支援を目指して～

2022年10月5日
@保健学系FD研修会

金沢大学 融合研究域 融合科学系 教授
東京大学 未来ビジョン研究センター 客員教授
株式会社LFOR 共同創業者・取締役
金間大介

©Innovation & Marketing Lab., Kanazawa University 1



○国際基幹教育院

取組名称	令和4年度第3回国際基幹教育院FD研修会
開催日	令和5年2月21日
参加人数 (概数)	研修会98名（対面40名、オンライン58名）

国際基幹教育院は、GS教育系と外国語教育系から構成されており、共通教育という大きな枠組みを共有しながら、一般教養科目と語学科目という個別の枠組みを有している。GS教育系FDと外国語教育系FDが融合した国際基幹教育院FD委員会では各系と共に催する形でFDを実施することとし、可能な限り、互いの系に還元できるテーマでFDを実施することを目指した。GS教育系は医薬保健、理工、社会科学や芸術まで全学術領域を網羅しており、他の学類と比較すると科目の多様性・個別性・特殊性が非常に強いと言える。また外国語教育系はTOEIC、EAP、初習言語と分かれ、特に初習言語は英語学修とは異なる個別性がある。そのようななか2系で共有できるテーマとして、本年度は3回の国際基幹教育院FD研修会を実施した。

睡眠には心身の疲労を回復する働きがあり、睡眠が量的に不足したり、質的に悪化したりすると健康上の問題や生活への支障が生じる。厚生労働省は、睡眠分野における国民の健康づくりのための取組として「健康づくりのための睡眠指針2014」を策定しているが、教育現場において睡眠の重要性はどれだけ理解されているかは疑問である。教員自身の健康管理だけでなく、研究や課題を実施に対する学生への睡眠時間に対する配慮も大切なことである。教育者や研究管理責任者が最新の科学的な睡眠に対する知識を持つことは、質の高い教育力の持続や研究の実行力や完遂性を高めることに繋がる。第3回国際基幹教育院FD研修会では、米国スタンフォード大学医学部精神科教授・スタンフォード睡眠生体リズム研究所所長西野精治先生を講師に招き、睡眠と健康に関連する研究成果の解説と意見交換を行った。

金沢大学国際基幹教育院 FD研修会（全学教員対象）
共催：融合学域、教学マネジメントセンター、保健管理センター

**スタンフォードと睡眠医学
—最高の睡眠で最幸の人生を—**

日 時：2023年2月21日（火）13:00～14:30
参加方法：総合教育講義棟2階A1講義室への出席
または Zoomによるオンライン参加

※参加者は、右のQRコードより参加申し込みを行ってください。
(参加申し込み期限：2023年2月17日（金）)
後日、ミーティングリンク(URL)・ミーティング番号・パスワード情報をご連絡します。途中参加・途中退出可能です。

睡眠には、心身の疲労を回復する働きがあります。睡眠が量的に不足したり、質的に悪化したりすると健康上の問題や生活への支障が生じます。自身の健康管理だけでなく、研究や課題を取り組む学生への睡眠時間に対する配慮も大切なことです。教育者が最新の科学的な睡眠に対する知識を持つことは、質の高い教育力の持続や研究の実行力を高めることに繋がります。

西野精治先生は、長年、米国スタンフォード大学で精力的に研究活動を行う中、2017年3月に『スタンフォード式最高の睡眠』を出版され、ベストセラーとなっています。本講演は、全学教職員対象のFD講演会です。西野先生と金沢大学との出会いが、「最高の睡眠で、最幸の人生を」送るきっかけになることを信じております。

【プログラム】
司会：瀧野隆久 国際基幹教育院GS教育系 教授
1.挨拶 澤田茂保 国際基幹教育院長
2.講演



西野 精治 先生
米国スタンフォード大学医学部精神科 教授
スタンフォード睡眠・生体リズム研究所 所長
(座長：唐島成寅 国際基幹教育院GS教育系 准教授)

3.質疑応答

問合せ先：国際基幹教育院外国语教育系 教授 趙菁 (内線5851)
zhaojing@staff.kanazawa-u.ac.jp

1-5 教学マネジメントセンターの活動

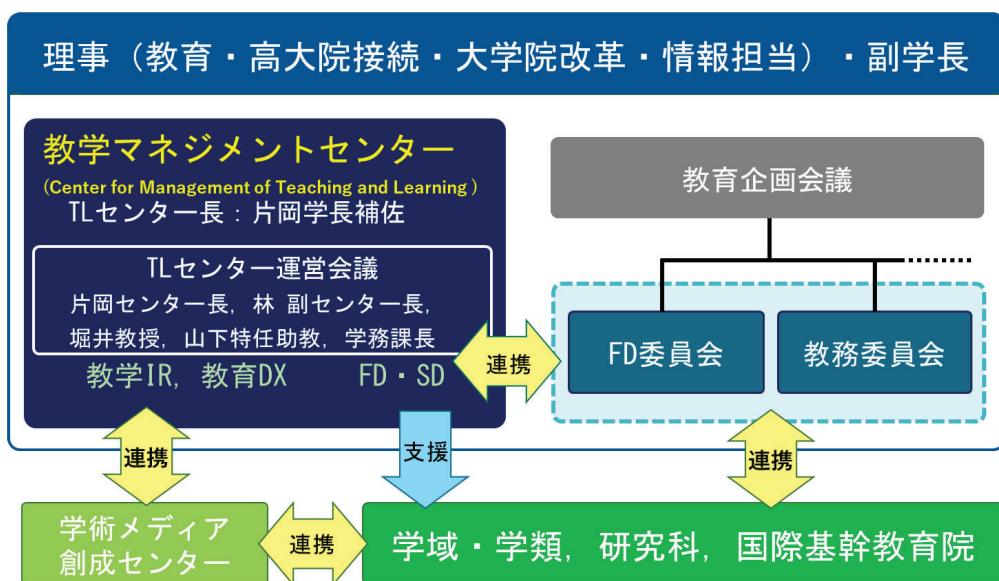
1-5-1 教学マネジメントセンターの業務概要

学長のリーダーシップの下、本学のFD支援、教学マネジメントを担ってきた国際基幹教育院高等教育開発・支援系及びICT教育支援を担ってきた総合メディア基盤センターを発展的に解消し、新たに令和3年4月に教学マネジメントセンター及び学術メディア創成センターを設置し、両センター連携によりFD、教学IR、教育DXを一体として推進する体制を構築した（図表1参照）。

学内のマネジメント体制強化のため、教育担当理事の下に置く組織として位置付け、学内の連絡・調整を円滑にするため、全学の教務委員長・FD委員長を務める学長補佐をセンター長に据え、センターの業務を掌理する体制とした。本事業で雇用する特任助教に加え、管理体制の強化、持続可能な体制構築のため、学長戦略ポストを用意し、他大学でプログラムコーディネート、教学マネジメントで豊富な実績を有する常勤の専任教師1名を新たに雇用し、センターの専任とした。

教学マネジメントセンターの具体的な所掌業務は、以下のとおりである。

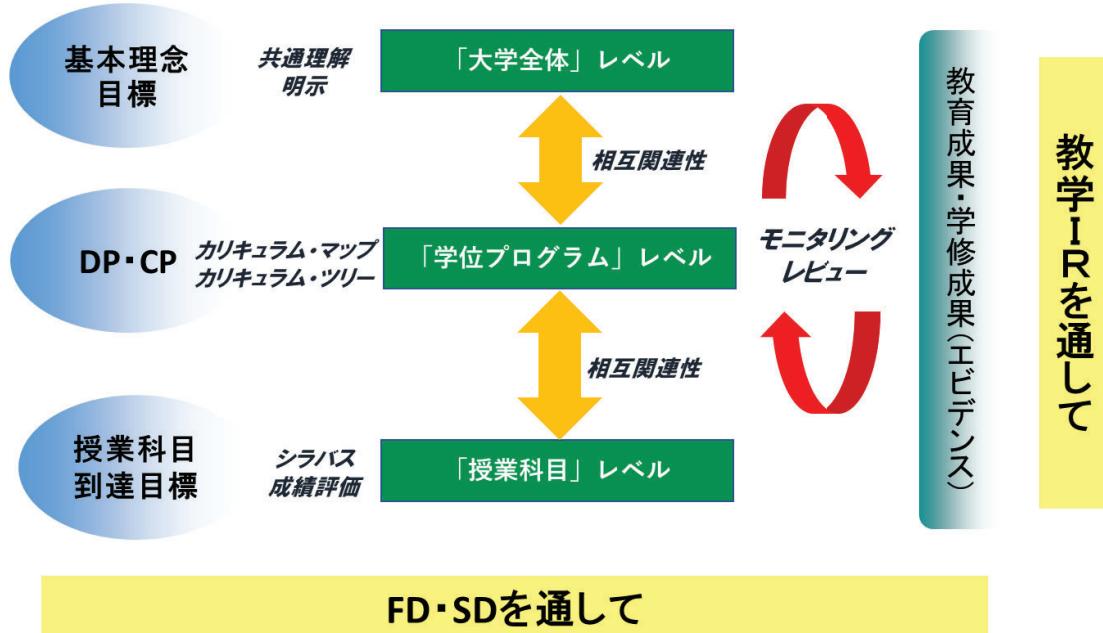
- ① 全学の教学マネジメントの確立、学位プログラム等における教育の質保証及び質向上に関すること。
- ② 教育方法、教育システム及び教育支援等に関する研究開発並びに教育に係る質保証システムの研究開発に関すること。
- ③ 全学的に取り組む教育事業及び分野横断的学位プログラムの企画立案、運営及び評価に関すること。
- ④ 教育スキルの向上に資する支援に関すること。
- ⑤ 全学のFD・SDの企画・実施及び学域・研究科等のFD・SD活動の支援に関すること。



図表1 教学マネジメントセンターの設置及び関係組織との連携体制

教学マネジメントセンターの諸活動を始めるにあたり、『教学マネジメント指針』（中央教育審議会大学分科会 2020）に示された「大学全体」「学位プログラム」「授業科目」レベルに応じた教学マネジメントの枠組を図表2のとおり体系づけながら、各レベルに応じたFD・SD、教学IRの環境整備と具体的取組を進めている。

教学マネジメントセンターの所掌業務①



教学マネジメントセンターの所掌業務②

項目 レベル	教育理念 学修目標	FD・SD (教育改善・組織開発・学生支援)	教学IR (学修成果測定・分析・情報公表)	支援業務
大学全体 (マクロ)	金沢大学憲章 KUGS	全学FD研修会 新任教員説明会 など	学生生活実態調査 など	中期計画 (教学) 認証評価 (教学) 大学間連携事業 など
学位プログラム (ミドル)	学位授与方針 (DP) 教育課程編成方針 (CP)	全学FD研修会 学域・学類FD など	卒業時調査 など	分野横断型学位プログラムの企画運営 など
授業科目 (マイクロ)	到達目標 ループリック評価	FDワークショップ FDランチョン CLA研修 など	学生授業評価 など	コンテンツ作成 学修アドバイジング など

図表2 教学マネジメントセンターの所掌業務の概要図

1－5－2 FD・SD 活動の枠組と実績

令和3年4月に、教学マネジメントセンターが設置されたことに伴い、理事（教育・高大院接続・大学院改革・情報担当）及び学長補佐（教育改革・学修支援担当）の指示のもと、全学的視点に立ったFD・SD活動を行なながら、部局FDとの協働・連携・支援を行っていく必要がある。このため、「全学FD・SD」と「部局FD」の関係性について事項整理しながら、「全学FD・SD」で担うべきこと、「部局FD」で担うべきことを明確化した。

【「全学FD・SD」の役割と基本メニュー】

- ① 「全学FD・SD」の役割
 - ◆大学の理念や基本方針の理解と共有
 - ◆教職員として知っておくべき事項、遵守すべき事項の理解と共有
 - ◆各年度における教学関連の全学的課題の理解と共有
 - ◆教職協働、教職学協働のための場づくり

- ② 「全学FD・SD」の年間メニュー（基本セット）

図表3 全学FD・SDの年間メニュー（基本セット）

時期	内容
4月	新任教員説明会
4月	CLA（クラス・ラーニング・アドバイザー）研修会
9月	全学FD研修会
10月	FD活動報告書成果発表会
12月	教学マネジメントセミナー（全学FD・SD）
2月	CLA（クラス・ラーニング・アドバイザー）実施報告会
2月または3月	教員向け英語研修会
3月	全学FD研修会（当該年度成果報告会）

【「部局FD」の役割と基本メニュー】

- ① 「部局FD」の役割
 - ◆各部局における主要事項の理解と共有
 - ◆各部局における各年度での諸課題の理解と共有
 - ◆各部局における授業・カリキュラム、学修状況・成果の把握・検証
 - ◆各部局における全学的課題の理解と共有

②「部局 FD」の基本メニュー

各部局に応じた組織単位での実施を尊重しつつ、部局主催での FD 活動について、以下の二つの区分に整理した。

- ア) 個別テーマ型 FD・・・ 部局における主要事項の理解と共有、部局における各年度での諸課題の理解と共有を目的として、当該部局が独自のテーマ設定により実施する FD
- イ) 統一テーマ型 FD・・・ 全学的課題の理解と共有などを目的とし、教学マネジメントセンター等が連携・支援しながら実施する FD
(授業評価アンケートや卒業・修了者アンケート等の結果報告、機関別認証評価で求められる学位プログラム単位の DP・CP、カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーに関する点検・見直しなど)

令和 4 年度においては、FD 委員会及び教学マネジメントセンターが企画実施する定例的な全学 FD 研修会に加え、先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）が本格実施されたことから、教職学協働型の KU-STEAM ランチョンセミナーを新たに企画実施した。また、高大接続コア・センターと共同主催にて「探究・STEAM フェスタ」という高校生・高校教員と大学生・大学院学生・大学教員が集う対話の場づくりを設けることができた。これらの取組は令和 5 年度以降も更に発展充実していく予定である。

本学では、各種セミナー・シンポジウム等を「知識集約型社会を支える人材育成事業」幹事校企画として学外に広く公開するとともに、録画データ及び配布資料を学内ポータルサイトにて公開・配信している。なお、令和 4 年度下半期からは対面実施が増えつつあり、対面とオンラインそれぞれのメリットを活かしながら効果的な FD の機会を提供していきたい。

令和 4 年度全体の FD・SD 実績は以下のとおりである。

図表 4 令和 4 年度 FD・SD 実績の概要

内 容	開催月日	参加者数
新任教員説明会	4月4日（月）午前の部 4月4日（月）午後の部	57名 111名
KU-STEAMランチョンセミナー	4月下旬～11月上旬 計14回開催	426名
ピア・サポート入門ミニセミナー 「ピア・サポートを始めるために知っておくこととは」	7月20日（水）	10名
全学FD研修会 「ピア・サポートを活用した学修者本位の教育の実現」	8月8日（木）	181名 (学外公開)
全学FD研修会 「金沢大学EMI科目（英語による科目）の現状と今後の展望 ---SGU最終年に向けて今できる科目開講のアイディア---」	9月28日（水）	87名
全学FD研修会 FD活動報告書成果発表会	10月29日（金）	61名
高大接続ラウンドテーブル特別企画 「探究・STEAMフェスタ2022 ～高校生の探究心に火を灯す～」	12月11日（日）	88名 (学外公開)
教学マネジメントセミナー2022 「教学マネジメントのあるべき姿を考えよう！ ～自律的学修者を育てるために～」	12月22日（木）	186名 (学外公開)
令和4年度「知識集約型社会を支える人材育成事業」 採択校合同シンポジウム	3月14日（火）	127名 (学外公開)

1－5－3 学位プログラムレベル・授業科目レベルを中心とした教学マネジメント環境整備

教学マネジメントセンターでは、創設2年目に当たる令和4年度において、学位プログラムレベル、授業科目レベルを中心とした教学マネジメントに関する基本的な環境整備を進めた。

具体的には、前年度に受審した大学基準協会による機関別認証評価で指摘された改善事項の対応等の必要性から、DP・CPを中心とした3つのポリシーの見直しを行うとともに、シラバスの記載項目の見直し、さらには、大学院学生版トランスファラブルスキルの策定に向けて検討を行った。

1－5－3－1 3つのポリシーの全学的見直し

【DP及びCPの記載に関する改善課題】

- (1) 中央教育審議会大学分科会大学教育部会『「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー）、「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー）及び「入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）』の策定及び運用に関するガイドライン』（平成28年3月31日）（以下、『3つのポリシーに関するガイドライン』という）に沿ったディプロマ・ポリシー（DP）及びカリキュラム・ポリシー（CP）の作成が不十分な点が見られた。具体的には、DPで求められる「学生が身につけるべき資質・能力の目標」の明確化（「何ができるようになるか」の具体的に示すこと）の再確認が必要である点、CPで求められる主要3項目（「教育課程編成」「教育課程における学修方法・学修過程」「学修成果の評価」のあり方等を具体的に示すこと）のうち、「学修成果の評価」の記載が欠落している点であった。
- (2) 令和3年度機関別認証評価結果では、指摘された学域学類・研究科専攻において、授与する学位ごとにDP・CPが書き分けられていない点、CPで求められる「教育課程編成」または「教育課程における学修方法・学修過程」の具体的記載がない点の改善が求められた。

【再整備事項】

- (1) 『3つのポリシーに関するガイドライン』の趣旨に則り、各ポリシーの一貫性・整合性を考慮する観点から、新たに、当該学位プログラム単位の3つのポリシーに関するテンプレート（図表5参照）を提示し、その記載項目に沿って、3つのポリシーの該当項目の記載・見直しを行った。
- (2) 学類・専攻において、授与する学位が複数存在する部局にあっては、授与する学位ごとにテンプレートへの各ポリシー記載を行った。これにより、授与する学位に関する教育プログラム（学位プログラム）ごとに3つのポリシーを整理することが可能となった。
- (3) テンプレートへの各ポリシー記載について不明な点がある場合には、教学マネジメントセンターが相談対応し、適宜、必要なコンサルテーションを行った。

1-5 教学マネジメントセンターの活動

図表5 金沢大学「3つのポリシーテンプレート」

金沢大学「3つのポリシーテンプレート」			教学マネジメントセンター
大学（大学院）の目的 ※学則、大学院学則から引用	学類（研究科）の教育研究上の目的 ※学類規則、研究科規則から引用		
ディプロマ・ポリシー（DP）	カリキュラム・ポリシー（CP）	アドミッション・ポリシー（AP）	
【卒業認定・学位授与に関する基本的考え方（前文）】 本学〇〇学類【研究科】は、…といった人材[研究者、社会人、市民]を育成することが社会から期待されている。 そうした人材を育成するため、本学類【研究科】では、所定の課程を修め、必要な単位を修得し、「かつ研究指導を受けた上で、）〇〇論文の審査及び試験に合格し、次のような目標を達成した者に、〇〇の学位を授与する。	【教育課程編成に関する基本的考え方】 本学類【研究科】では、ディプロマ・ポリシーに掲げる目標を達成するために、全学共通科目、専門教育科目を体系的に編成し、講義、演習、実験、実習を適切に組み合わせた授業科目を開講する。教育課程については、カリキュラム・ツリー やナンバリングを用いてその体系性や構造を明示する。	【入学者受け入れに関する基本的考え方（前文）】	
【学生が身に付けるべき資質・能力】 （※「学生が何ができるようになるか」を分かりやすく具体的に記載（シラバスの学修目標のような記載の仕方に心掛ける）） (1) ………………できる能力。 (2) (3) (4) (5) ……	【教育内容・教育方法（教育課程実施）に関する基本的考え方】 1. 教育内容 (1) ……… ●カリキュラムを通じた具体的な授業科目構成と教育内容を記載。 ●科目群では、～の内容を学ぶ、など 2. 教育方法 (1) ……… ●教育修習目標を達成するために採用する具体的な教育方法を記載。 ●フィールドワークを重視している、など	【求める人材】	
【学修成果の評価】 (1) ……… ●教育内容・教育方法に即した多様で柔軟な評価方法を網羅的に記載。 ●各科目の評価基準・方法はシラバスに示す。卒業研究の評価は●●によって行う。卒業時に質問紙調査を行っている。など	【選抜の基本方針】		
		【入学までに身に付けて欲しい教科・科目等】	

【系統的な再整備を行う上での前提情報】

『3つのポリシーに関するガイドライン』に基づき、3つのポリシーの定義付けが明示され、かつ、3つのポリシーの公表が義務化された。なお、3つのポリシーの公表の義務化（根拠規定：学校教育法施行規則）については、学士課程は平成29年4月から、大学院課程については令和2年4月から適用されている。

『3つのポリシーに関するガイドライン』では、下表のとおり、各ポリシーの基本的な考え方を定義しつつ、3つのポリシーの一貫性・整合性に加え、それぞれのポリシーに書き込むべき項目が具体的に列挙されているので、それに従って確認を行った。

図表6 3つのポリシーの基本的な考え方の定義

ディプロマ・ポリシー	各大学、学部・学科等の教育理念に基づき、どのような力を身に付けた者に卒業を認定し、学位を授与するのかを定める基本的な方針であり、学生の学修成果の目標となるもの。
カリキュラム・ポリシー	ディプロマ・ポリシーの達成のために、どのような教育課程を編成し、どのような教育内容・方法を実施し、学修成果をどのように評価するのかを定める基本的な方針。
アドミッション・ポリシー	各大学、学部・学科等の教育理念、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに基づく教育内容等を踏まえ、どのように入学者を受け入れるかを定める基本的な方針であり、受け入れる学生に求める学習成果（「学力の3要素」※についてどのような成果を求めるか）を示すもの。 ※（1）知識・技能、（2）思考力・判断力・表現力等の能力、（3）主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

(総論)

- 各大学における教育研究の特性を踏まえ、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びアドミッション・ポリシーを一貫性・整合性あるものとして策定するとともに、三者の関係を分かりやすく示し、大学内外に積極的に発信すること。
- 当該大学に関心を持つ様々な関係者（多様な入学希望者、学生、父母等、高等学校関係者、地域社会、国際社会、産業界等）が十分に理解できるような内容と表現とすること。

(ディプロマ・ポリシーについて)

- 各大学の教育に関する内部質保証のためのPDCAサイクルの起点として機能するよう、学生が身に付けるべき資質・能力の目標を明確化すること。
- 「何ができるようになるか」に力点を置き、どのような学修成果を上げれば卒業を認定し、学位を授与するのかという方針をできる限り具体的に示すこと。その際、学士課程答申で示された「各専攻分野を通じて培う学士力～学士課程共通の学習成果に関する参考指針～」を踏まえるとともに、日本学術会議の「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参考基準」等も参考とすることが考えられること。
- 学生の進路先等社会における顕在・潜在ニーズも十分に踏まえた上で策定すること。

(カリキュラム・ポリシーについて)

- ディプロマ・ポリシーを踏まえた教育課程編成、当該教育課程における学修方法・学修過程、学修成果の評価の在り方等を具体的に示すこと。その際、能動的学修の充実等、大学教育の質的転換に向けた取組の充実を重視すること。
- 卒業認定・学位授与に求められる体系的な教育課程の構築に向けて、初年次教育、教養教育、専門教育、キャリア教育等の様々な観点から検討を行うこと。特に、初年次教育については、多様な入学者が自ら学修計画を立て、主体的な学びを実践できるようにする観点から充実を図ること。

(アドミッション・ポリシーについて)

- ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーを踏まるとともに、「学力の3要素」を念頭に置き、入学前にどのような多様な能力をどのようにして身に付けてきた学生を求めているか、入学後にどのような能力をどのようにして身に付けられる学生を求めているかなど、多様な学生を評価できるような入学者選抜の在り方について、できる限り具体的に示すこと。また、必要に応じ、入学前に学習しておくことが期待される内容についても示すこと。
- 入学者選抜において、アドミッション・ポリシーを具現化するためにどのような評価方法を多角的に活用するのか、それぞれの評価方法をどの程度の比重で扱うのか等を具体的に示すこと。

1-5-3-2 シラバス記載項目の見直し

『教学マネジメント指針』(中央教育審議会大学分科会 2020)において、授業科目レベルの教学マネジメント中核として、シラバスのあり方が以下のとおり記載されている。

新任教員研修会をはじめとして、シラバスの書き方に関する FD 活動、マニュアル作成は教育の質保証を図る上で欠かせない事項である。また、近年では、令和 2 年度国立大学法人運営費交付金「成果を中心とする実績状況に基づく配分」の指標のうち、「カリキュラム編成上の工夫の状況」として、シラバスに「準備学修に必要な学修時間の目安」を設定することが提示され、当該事項は、以下の『教学マネジメント指針』本文に反映されている。

さらに、本学が令和 2 年度に採択された文部科学省「知識集約型社会を支える人材育成事業」において、授業科目シラバスの記載内容がチェックされており、改めて、本学のシラバス記載項目について、他大学の現状も参照しながら、点検及び改善を行う必要がある。

«『教学マネジメント指針』 II 授業科目・教育課程の編成・実施 p.20»

○ シラバスは、個々の授業科目について学生と教員との共通理解を図る上で極めて重要な存在である。米国では、教員と学生の契約書と理解されている例もある。単なる講義概要（コースカタログ）にとどまることなく、学位プログラムの「卒業認定・学位授与の方針」における当該授業科目の位置付けや他の授業科目との関連性の説明、学生が事前準備のための学修や事後の発展的な学修を主体的に行う上での指針とすることができる事前・事後学修の指示を含み、授業の行程表として機能するとともに、「何を学び、身に付けることができるのか」（到達目標）を明確に定めることで適切な成績評価を実施するための基点としても機能するよう作成される必要がある。具体的には、

- ・授業科目の目的と到達目標
- ・「卒業認定・学位授与の方針」に定められた学修目標と授業科目の到達目標の関係
- ・授業科目の内容と方法
- ・授業科目の計画
- ・成績評価基準
- ・事前学修と事後学修の内容

等を盛り込む必要がある。なお、事前学修及び事後学修については、これらに必要な学修時間の目安を示すことも考えられる。また、到達目標の達成状況を定量的又は定性的な根拠に基づき評価することができるよう、到達目標を定めるに当たっては、例えば「学生は、～することができる」といった形式で記述することも考えられる。

【一部見直しした項目】

(1) 学修目標（到達目標）の項目の精選

現状において、「授業主題」「授業目標」「学生の学修目標」「学修成果」という項目が並んでいたが、「授業主題」に続く記載項目である「授業目標」「学生の学修目標」「学修成果」を「学修目標（到達目標）」に統合し、「授業主題」「学修目標（到達目標）」という記載項目の並びに整理した。具体的な記載方法については、記載例を示しながら、シラバス入稿要領にて周知徹底することとした。

「学修目標（到達目標）」に修正

■ 授業目標

今現在学んでいる大学という組織に関心を深めることから、この大学での学習はスタートする。一体、大学は、どのような歴史を経て、どのような社会的影響を受けながら成り立っているのだろうか。大学は、それまで学んできた小・中・高等学校とは明らかに異なる。大学を構成する学生や教職員が多様であるだけでなく、大学が果たすべき使命や機能も非常に多様である。このような大学が持つ多様性や複雑性の醍醐味を学習を通して実感し、大学教育の機能について理解を深める。また、大学における学習者としての学生の位置付けを自覚するように努める。

学生の学修目標

金沢大学がどのような構成要素で成立しているかを説明することができる。
金沢大学の歴史や制度を理解し、大学教育の方向性を説明することができる。
金沢大学における学びの意義を説明することができる。

学修成果

(1) 金沢大学を取り巻く社会情勢や国際情勢を判断し、現実を見つめる力(現状把握力・分析力・洞察力)を養う。
(2) 主体的に大学教育の意義に関心を示し、積極的に意見を述べることができる。
(3) 金沢大学生としてのアイデンティティを養う。
(4) 大学が持つ多様性や複雑性を受容する力(柔軟性)を養う。
(5) 学習プロセスにおいて、読み解き力・自己表現力・記述力を養う。

図表7 シラバスにおける「学修目標（到達目標）」の記載項目整理

（2）授業時間外の学修に関する指示における「必要な学修時間の目安」の明示

令和2年度国立大学法人運営費交付金「成果を中心とする実績状況に基づく配分」の指標のうち、「カリキュラム編成上の工夫の状況」として、シラバスに「準備学修に必要な学修時間の目安」を設定することが提示され、当該事項は、『教学マネジメント指針』本文にも反映されている。授業時間外の学修に関する指示（予習に関する指示、復習に関する指示）欄における「必要な学修時間の目安」の明示について、記載例を示しながら、周知徹底することとした。

1-5-3-3 大学院教育におけるトランスファラブルスキルの策定検討

本学では、令和4年度から、博士前期・後期課程における大学院GS科目を強化し、大学院学生が将来のキャリアに備え、幅広い識見や異分野の知識・スキルを修得することで、主たる専攻分野での深い探究に役立つことを目指している。特に、昨年度採択を受けた科学技術振興機構「次世代研究者挑戦的研究プログラム～博士後期課程学生の挑戦を支援する～」では、博士後期課程学生が自分自身のキャリアを構築し、自立した研究者・技術者となることができるよう、「生活費相当額及び研究費の支給や、キャリア開発・育成コンテンツ（国際性の涵養、学際性の涵養、キャリア開発、トランスファラブルスキルの修得、インターンシップ等）をはじめとする様々な支援」を提供する取組を進めている。

また、令和4年度国立大学法人運営費交付金「成果を中心とする実績状況に基づく配分」の指標のうち、「大学教育改革に向けた取組の実施状況」として、博士前期課程・修士課程、博士後期課程・博士課程、専門職学位課程におけるトランスファラブルスキル（社会で広く活用できる汎用的なスキル）のカリキュラム上の明確化、さらには、トランスファラブルスキルを含めた学修成果の可視化や就職活動等での活用が求められている。

上記のような状況を踏まえながら、金沢大学未来ビジョン『志』milestoneにおいて、大学院教育における大学院学生版トランスファラブルスキルを策定することを行動計画として掲げている。

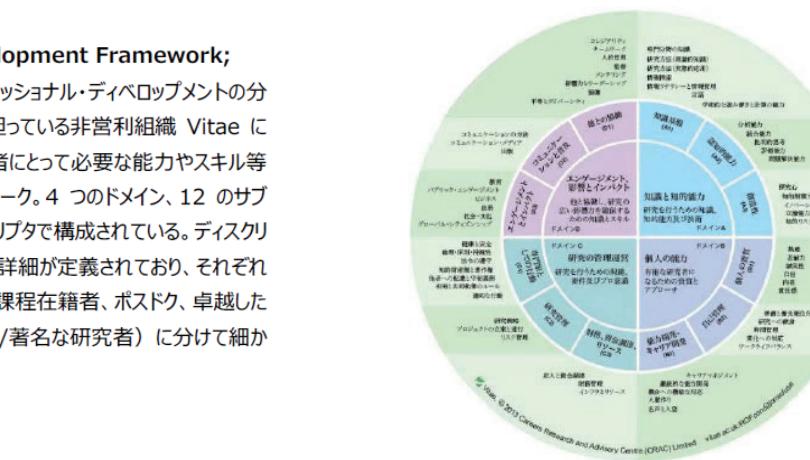
令和4年度国立大学法人運営費交付金「成果を中心とする実績状況に基づく配分」の指

標に関する文部科学省の補足説明資料では、「社会で広く活用できる汎用的なスキル（トランスマネジメントスキル）」とは、例えば、欧洲科学財團（European Science Foundation）の報告書“Research Careers in Europe Landscape and Horizons”（2009）では、「一つの文脈で学んだスキル、例えば、研究を行う上で学んだスキルの中で、他の状況、例えば、研究であれ、ビジネスであれ、今後の就職先において有効に活用できるようなスキルのことである。そしてまた、トランスマネジメントスキルがあれば、学問領域及び研究関連のスキルを効果的に応用したり、開発したりすることができるようになる」と定義されており、そうした取組を想定しています。」と記載があり、具体的な事例として、英国の非営利組織Vitaeが2010年に開発した研究者人材に必要なトランスマネジメントスキルのフレームワーク（RDF）を提示している。

なお、大学院教育におけるトランスマネジメントスキル・トレーニングについては、2010年代に注目され、大阪大学などにおいて当該トレーニングを行っている実績がある。

Researcher Development Framework;

英国においてプロフェッショナル・ディベロップメントの分野で中心的な役割を担っている非営利組織Vitaeにより開発された、研究者にとって必要な能力やスキル等を体系化したフレームワーク。4つのドメイン、12のサブドメイン、63のディスクリプタで構成されている。ディスクリプタごとに必要スキルの詳細が定義されており、それぞれ研究者の段階（博士課程在籍者、ポスドク、卓越した研究者、シニア研究者/著名な研究者）に分けて細かく設定されている。



図表8 Researcher Development Framework (Vitae)

【取組の方向性】

(1) 大学院課程<グローバル>スタンダードの改訂と学生・教職員への明示

本学では、大学院課程<グローバル>スタンダードが策定・公表され、「1. 強固なグローバルマインドと明確な倫理的思考：今後、人類が直面するグローバルな課題に果敢に挑戦し、常に一個人の立場として、確たる倫理的普遍性をもった見識と判断の下に責務を遂行する能力」「2. 創造性・交渉力・統率力・実践力：解決困難な課題にも、革新的なアイデアと粘り強い交渉力を發揮し、強い統率力と確かな実践力をもって局面を開拓する能力」が掲げられているが、内容面において、上記の趣旨を踏まえつつ、改訂を行うことが必要である。具体的には、大学院GS科目的学修目標と関連付けつつ、大学院学生版トランスマネジメントスキルとして再定義し、学生・教職員に明示することを検討したい。

(2) 大学院学生版トランスマネジメントスキルの学修成果可視化と学生への明示

大学院課程<グローバル>スタンダードの改訂を踏まえながら、当該スタンダードで定

めたトランスファラブルスキルの修得度合について、博士前期課程・修士課程、博士後期課程・博士課程及び専門職学位課程の学生を対象に、学務情報システム等を通して自己評価アンケートを定期的に実施することが考えられる。そして、当該自己評価結果を学生個々人が同システム上において確認できるようにすることが考えられる。

併せて、大学院 GS 科目における授業評価アンケート等を集計・分析しながら、大学院学生版トランスファラブルスキルの修得度合を把握していきたい。

1-5-4 教学 IR 環境整備

令和 3 年度に改善充実を図った学生授業評価アンケート、卒業・修了者アンケート、卒業・修了後アンケートについては、令和 3 年度から令和 4 年度にかけて実施及び回答結果の利活用が進んでいる。

授業評価アンケートについては、新システムに移行することに伴い、回答率が大幅に改善された。現在、回答結果の集計・分析等について、BI ツールを活用して可視化・閲覧できる環境整備を進めている。

卒業・修了者アンケートについては、令和 3 年度卒業・修了者から新しい設問内容にて実施され、教学マネジメントセンターにて集計した回答結果を部局にフィードバックし、FD 活動等に活かしている。

卒業・修了後アンケートについては、本学の過去 20 年間の卒業・修了者を対象者に実施され、教学マネジメントセンターにて集計した回答結果を FD 委員会にて報告するとともに、その一部の内容を「令和 3 年度 FD 活動報告書・資料編」に掲載・公表している。

以上の学生調査の実施体制の整備に関連して、令和 4 年度には、キャリア支援室と協働しながら、就業先企業アンケートを定期的に行う環境を整え、令和 4 年 12 月～令和 5 年 1 月に開催された「業界・企業研究会」に参加した企業等を対象にウェブアンケートを実施し、85 社からの回答を得ることができた。

1-5-4-1 新・授業評価アンケートの共通設問化について

全学での授業アンケート設問を可能な限り、共通項目化し、学生の回答負担を軽減することを考慮しながら以下の 7 項目を共通設問とした。

【共通設問項目】※授業評価アンケート回答画面にてシラバス検索画面を参照できるように設計。

① 授業内容の適切性

設問「この授業は、あらかじめシラバスに示された学修目標や授業計画に沿って行われましたか？」

② 担当教員の説明の仕方

設問「この授業における教員の説明の仕方は、分かりやすいものでしたか？」

③ 授業外学修時間

設問「この授業について、授業外学修（授業の予習・復習、レポート作成、試験勉強などを含む）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業 1 回あたりの時間に換算してお答えください。」

④ 授業理解度

設問「この授業の内容を、よく理解できましたか？」

⑤ 学修目標達成度

設問「この授業あなたは、シラバスに記載された学修目標を達成できましたか？」

⑥ 授業満足度

設問「この授業の内容は、満足できるものでしたか？」

⑦ 授業全般に関する自由記述

設問「この授業に関する感想や要望等があれば、具体的に記述してください。」

なお、上記の7設問以外に、やむを得ず、部局独自で設問したい場合には、学生が回答する際の煩雑さを極力避けたいため、部局独自設問は最小限となるように努めることとした。

1-5-4-2 新・授業評価アンケート導入に伴うシステム改修作業について

教育担当理事の指示に基づき、「お茶の水女子大学の授業アンケートシステム（nigala）」（図表9参照）に関する情報収集を図るとともに、令和3年度第2回全学FD研修会において当該テーマを取り扱い、具体的な検討を続けてきた。

教学マネジメントセンター、
学術メディア創成センター、学務課が連携した検討の結果、

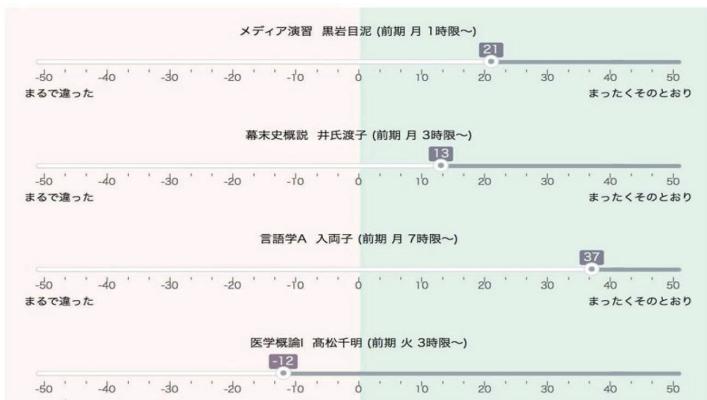
「お茶の水女子大学の授業アンケートシステム（nigala）」を参考にしながら、本学独自での授業評価アンケート回答画面改修を行い、学務情報システムにて運用できるような措置をとることとし、具体的な改修作業に取り組み、令和4年度からの全学実施に漕ぎ着けた。

Web授業アンケートシステム nigala

Web授業アンケートの方法

-50～50までの101段階反応抽出・事実上の連続量アナログ尺度
設問ごとに各自の履修授業全体を対比較

残り7問：この授業は学生の理解度を把握しながら進み、全体の内容は質、量ともに適切でよく理解できた。



連続量アナログ・自由評定尺度での回答抽出により
①微妙に差異化された反応の相違が読み取れる
②回答者に特有な反応傾向による差異を標準化できる

図表9 お茶の水女子大学の授業アンケートシステム（nigala）

<https://crdeg5.cf.ocha.ac.jp/crdeSite/enquete.html>